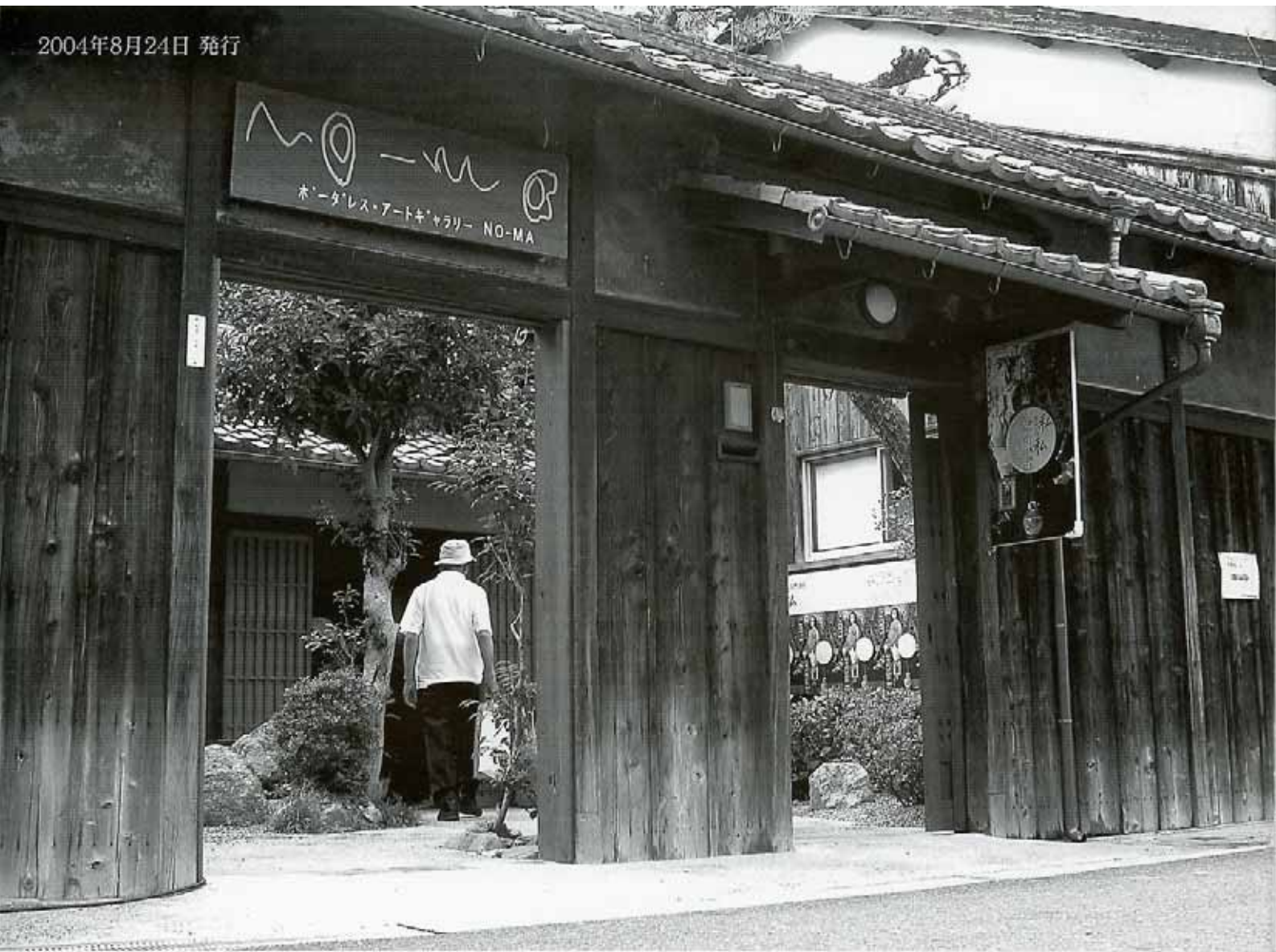


2004年8月24日 発行



NO-MA  
*Borderless Art Gallery NO-MA*

ボーダレス・アートギャラリーNO-MA ニュースレター 1号



# 右脳バンザイ体験講座トークショー

## 「表現活動の源とは」

山中 康裕 (京都大学大学院教育学研究科教授・医学博士) 今井 祝雄 (成安造形大学教授・造形作家)

山下 残 (ダンサー・振付家) はたよしこ (コーディネーター)

### なぜ描くのか、なぜ踊るのか

はた: 自分自身が絵を描くときに、私は何故描きたいのかなあと考えてみると「何か形にならないもやもやしたもの」が私の中にあって、「自分の目に見える形にしてみたい」と思うんですね。それを言葉に置き換えるのは難しいけど、絵では描けるという感じのことがあったりする。今井先生は、作家として作品をおつくりになる時、どう思うかや発動機が動いて、おつくりになるんですか?

今井: 僕は、なにかつくりだすにはいられないという気持ちになかったら、むしろ、つくりだす方がいいと思いますね。それと同時に、つくるプロセスも面白いわけですね。あえて言葉にすると僕も「こういうものを自分自身が見てみたい」という思いを形にするためにつけていますね。

山下: 僕の場合は、ダンスなので、なぜ踊りたいのかと考えることはよくあります。なぜ踊りたいのかということ、目立ちたいというのが原点なんです。同時に、目立つためには色々方法があって、人と競争して、勉強やスポーツに勝って目立つ方法もある。僕の場合、人と競争するのは、苦手であまりやりたくなかったんですね。人と競争せずに目立つにはどうすればいいのか、を考えて、ダンスに行き着いた、と僕は考えています。

はた: 色々な方の表現の衝動があるわけですが、目立たなくても死ぬわけではない。自分が見たいものをつくり出す。でもそれができなくても死ぬわけではない。いわゆる、表現活動ができなくても、生物として存在できないわけではないわけですね。表現活動を剥奪されたとしても、でも人間は表現したい衝動に駆られる。これは何故なのか?非常に漠然とした質問ですが、山中先生だからあえてしてみます。

山中: ものすごく難しい質問ですね。はたさんが先ほど、表現活動を剥奪されても生命に別状はないとおっしゃいましたが、そんなことはないですよ。表現を全部剥奪されたら、おそらく生命なんて長く続かないと私は思う。特に心を持っている生命体である人間が、なぜ表現を要求するのか、必要とするのか。身体は見えないけど、心は見えないからです。

さきの山下さんのワークショップを拝見していても面白かった。みなさんの色々な、身体の表現を見ることができて、やっぱり心は見えないのですよ。その見えない心が原点にあるので、今井先生が言われた、見たいものをつくるのだ、というのは、まさに心の発言なわけですね。「心は本来見えないものだから、何らかのかたちで見えるものにしよう」というのが、表現活動なのだ、というのが私の表現活動の定義なんです。そこからいうと、はたさんが言われた、なぜ人間は表現したがるのか、それは、まさに心が表現したがるんです。僕は、おしゃべりですよ。まず第一は話をしてみんなとつながる、話をしてみんなと関わる、という部分に僕の表現がある、と思う。

はた: 「つながる」とおっしゃいましたけども、知的障害の人たちとのつきあいをベースに話しますと、特に自閉傾向のある人たちは、ずうっと自分の世界に深く深く沈没していきように見える。それどころか、他人とつながろうとしていないように見えるんですが、今井先生に伺いますが、人間の中には外向きの、つまり、他者とつながりたいという表現のエネルギーと、他人なんてどうでもいい、自分の内へ内へと入っていく欲求と、私は両方あるような気がするんですが。

今井: 両方ありますね。両方のバランスが大切だと思うんですね。自分の関心事や、興味をまず見える形としてつくってみる。つくったら、しまっとくじゃなくて人に見せる。見せた人の反応がよければ、自分と言葉が通じる。言葉にならない言葉が通じる、つまり感性が通じる。自分の関心事を他者と共有することが喜びにつながり、また次の表現意欲に結びついていくのかなと思うんです。近年、コミュニケーションそのものを題材にしているアーティストも増えてきましたし、双方向作用というのは無視できないと思うんです。

はた: 例えば、今井先生の作品に、ご自身のポートレートを毎日撮っている、という作品がありますが、自閉症の方とかは毎日同じことを繰り返して、一見、他人にその作品を見せる気はなさそうなんです。なぜそう思うかということ、わりと、作った作品を平気で捨ててしまう、または、捨てられてもそんなに未練がないようで、自分のなかで完結しているように見える時があるんです。そういう感覚というのは今井先生にはおありになりますか?

今井: 片手でボラロイドカメラを持ち、もう片方の手に、前日の日付を入れた写真を必ず持って、自分の顔写真を撮るということをはじめ、四半世紀になるんですね。自分でこの写真を公開したいとはあまり思わなかったのですが、二年前、これを公開したいという人が現れたんですね。20年分、7000枚くらいの写真が、ギャラリーに貼りめぐらされたのですが、ほくは、それを見に来た人の反応が面白かった。顔についてどうこうはあまり言わないですよ。まず、集積について、驚いて、次ぎに、書いてある日付を見て、若い人が「私が生まれた日だ」と言っていたり、ご夫婦が「結婚記念日だ」と言っていたり、ファッションに興味のある人は、「この人何年も同じ服を着てる」と言っていたり。最初は、日記のつもりで始めたんですね。書く方の日記はなかなか続かなかったのですが、毎日、歯を磨くような感覚で写真を撮り続けています。

はた: 山中先生は日記マニアであることがわかったんです。日記というか、その日気になった広告などをコラージュして、そこに絵を描いたり、字を書いたりといったことを何年もなさっているということを知ったのですが。

山中: とんでもない話ができましたね(笑)。私は和紙のノートを使っているんですが何故、和紙

かという、消しゴムや鉛筆をつかえない、つまり修正がきかない。しかも、墨を摺って、筆で書くということになる。一発勝負で1日一枚。今井先生の写真とやってくることは同じなんです。今10年続けていて86冊目になります。自分が自分であることの確かめの操作、つまりアイデンティティです。例えば日記を書くこともその一つです。はたさんが先ほど言われた自閉の方々が、自分で書いているのに、書いたことそのものに執着を示さない、コミュニケーションの目的があるのかないのかわからない、でも書いている。実は書いていることが、大変大切なことで、本人にとっては、書いたことで、「自分」を確認してるんですよ。私が初めて自閉の子に出会ったのは30何年前で、初めて会ったとき、はたさんと同じ印象を持ったんです。1時間以上ずっと線をひいているだけで、それが進展していくわけでも何でもないわけ。ところが、それをしていくことで、彼は自分の心を落ち着かせているわけですよ。そのことがひたすら彼が必要としている表現なのです。実際客観的に見ると、その子は他人とつながれないからそうしているわけでもあるんです。もしつながってたら、そんな線なんか描く必要ないわけ、なぜつながれないのかということとそういう世界を彼らは生きていくからですよ。彼らは、その世界を、そう望もうと望まないと関わらず、生きざるをえなくて生きています。その世界に存在するために、線を引かないと生きていけないわけですよ。説明したらこういうことですが、そこで、ああそうか、なんて思わないでください。私、そういうことを説明したくて言ってるわけじゃないんだから。要するに、コミュニケーションの問題とかは、あとでついてくるものであって、本来表現しているときには、そういうものは目的とされているわけではない、と思うのです。ですからコミュニケーションという別の観点でみると、今井先生の7000枚の写真の話はとても面白いのです。人々は絵を見て、結局何を見ているかということ、自分を見ているんです。心理学の言葉では、「投影」というんだけど、相手が描いた絵を見て、自分を見ている。それが誕生日であったり、結婚記念日であったり、人々はそこに示された画面に自分を見る。それがコミュニケーションになる一つの可能性を持っていると私は思うのです。見る人にとって必要だから「受け取る」というコミュニケーションが起こるので

### ダンスと言葉の循環

はた: 残さん、先ほどやってくださったワークショップで、人と人とのコミュニケーションの循環が起こっていて、それが、面白いと思います。でも残さん個人では、コミュニケーションということを外して、誰が見てなくてもいいや、というような表現や踊りをなさることは、あるんですか?

山下: 始めは自分の踊りを人に見せようかと思ったわけではなく、自分が動いているのが気持ちよかったりとか、毎日のトレーニングで自分の身体がどどんかかっていくのがすごく楽しくて、それを目的にダンスを4、5年続けてきました。



# 右脳バンザイ体験講座



## ワークショップA 「即興、笑える絵画」

ナビゲーター：はたよしこ氏

2004年3月20日(土・春分の日)、京都大学総合博物館にて、ボーダレス・アートギャラリーNO-MA先行企画の第三弾として、絵画とダンス二種類のワークショップとトークショー(先述)を行いました。どちらも、京阪神間を中心に、遠くは愛知県から、定員25人を大幅に上回るご参加がありました。「障害のあるなしに関わらず、表現活動を共同し、みんなこそって自由になろう」をキャッチフレーズに、参加者それぞれの表現の根源を探し、表現活動に共感しあう時間を過ごしました。



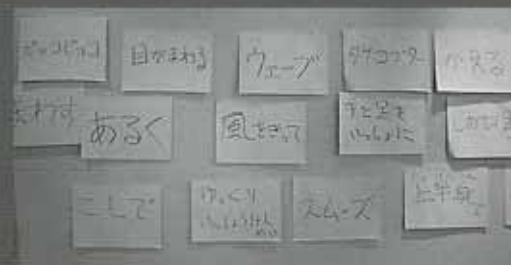
## トークショー

写真左から： はたよしこ氏  
今井祝雄氏  
山中康裕氏  
山下残氏



## ワークショップB 「私のダンス みんなのダンス」

ナビゲーター：山下残氏





あるカルト宗教の教祖が「自分は宙に浮いてる」と表現するのを知ると、一般の人は、うさんくさく思っていると思うのですが、ダンスをやっている時分かるような気がします。一つの動作を繰り返したり、呼吸法によって、自分の身体が宙に浮くような感覚が実際あるんですね。その感覚が楽しくて、これがダンスだなあと感じていたわけなんです。しかし、自分だけ気持ちよくなるんじゃないで、それにいたるプロセスを人と共有することで、理解してもらおうと考えるようになりました。やっぱり、気持ちよくなるためのプロセスを人と共有することで、作品として、表せられないんじゃないかなあ、と気づきました。それと、ダンスというのはそもそも言葉を使わない表現ですから、何か一つの振りを表現することで色々な人が色々な見方をするんですね。さらに、僕は「言葉」というものにも個人によって様々なイメージがあることをダンスという作品の中で伝えたいと考えています。

山中： 言葉を媒介にしてダンスをつくっていくとか共有していくという考え方はとても面白いですね。何故かという、私の観点からものをいうと、実はダンスというのは、身体イメージ、つまり、身体の内的なイメージ、それが動きを伴って変容するところに、一番の楽しみ、うれしさがあるという言い方をされたと思うんですけど、自分の内界で変容していくイメージというのは、他者には見えないわけですよ。ただダンスとして表現した部分は、他者に伝わるので、それを共有する一つのキーに言葉を選ばれたというのは悪くないですね。だけど、ダンスは本来、そういう言葉のコミュニケーションと違う次元のことをするためにあるものですよね。ところが、おそらく山下さんの中では、それをもう一つ発展させる代替項に言葉が使われてるんですね。ある言葉のイメージを限定してしまうこと自体が既に間違いなんです。その言葉は一つのある部分を表す、代表させるサインにすぎない。言葉ってのもともともさういものなんだから。そのサインから、なにを自分のイメージの中でふくらませることができるか、一人一人、同じ言葉を使ったとしても表現されることが違ってくるといことは当然で、そこに新しい発展がある点に着目されたのは、とても面白いと思いました。さっき、ライオンのお真似をされたと思うんですけど、ライオンだということもある、違う。私だって強いねん。」という表現もある。そういう個人の非常にパーソナルな部分と共有できる部分との間をつなぐものがライオンという言葉だったんです。

## 表現と表出

はた： 先刻のダンスのワークショップでライオンのまねをした女の子は、普段、私のアトリエに来てる自閉症の子なんです。ものすごく小さなものをびっしりと描くんです。小さな間口にどんどんはいり込んでいって快感を覚えているタイプなんです。今日の残さんのダンスに参加している彼女を見て、別人のようで、非常に驚きました。そこで表現と表出、意志的なものと、出てしまうものというふうな、言葉を使い分けたとすると、作家と障害を持つ人のつくり出すものは違うのだという議論が私の中で気になっています。

今井： どこで表現と表出に分けるか、また、どこで自己表現と芸術表現に分けるか。その辺の境目は大変難しいものです。アーティストにとっては非常に意志的なものですが、障害を持つ人の作品の場合は、本人の意志はなかなか分かりにくいですね。

山中： 表現と表出の差異のあるやなしやについてですね。今井先生のご意見に僕も同感ですが、実は哲学ではそのことを表象と言ってきたわけですよ。哲学者が、難しい言葉を連ねて言ったものも、障害のある方が表現したことも、すごいと

言われている画家が描いた一枚の絵も哲学的には、みんな等価なんです、一緒なんです、価値は。では何故、画家の人たちが、これは、自分の表現だと自己主張するのか、ここ（ワークショップで制作された絵を指して）に描かれたものが絵画的に意味がないのか。全然そんなことはないですよ。すごい画家が描いた一枚の絵とここに描かれた一枚の絵と、どっちが高いか低いか、哲学的には全くイコールなんです。はたさんが提起された表現と表出はどう違うか、全く差はないのです。差がないところに人々が差をつけようとする、それが問題なんです。人々みんなが持っている能力なのだとすることで、もう一つだけ言うと障害を持つだけで、エネルギーの噴出する意が凝縮される分、心を打つ作品になる。芸術的にどうかなんて、どうでもいいんですよ、私には。障害のある人の表現の「意」を見つけてあげるのが、その指導者、同伴者の仕事であって、その「意」がその人にとって一番最高の「意」であれば、絶対心を打ちます。

はた： 私もすずかけ作業所の人たちの表現に初めて出会った時に、なんでこんなにすごいんだろうとまず思いました。何年かやってるうちに、「私とどこが違うのだろう」と思ったときに私は小出しの表現パイプを持ちすぎている、しゃべりすぎるし、発散の小道具を色々持ちすぎている、つまり、それぞれに小さいパイプがいっぱいあって、だらだら出しているんだなあ、と思ってしまいました。ところが、知的障害の人たちは、このパイプしかないというくらい勢いで絵を描く。この部分ではどうやって太刀打ちできない、という感じを持ったことを思い出しました。

今井： 健常者の場合は、作品をつくり出すときに、無理矢理絞り出す、現代美術なんかわりとそんな感じだと思ってるんですけども。以前、「具体」という美術集団がありました。僕は、18年続いた後半の8年いたんです。「具体」というと、例えば、足で描く画家がいたり、ガラス瓶に絵の具を入れて、それをぼんぼんと投げつけてキャンパスに炸裂さすような人がいたりするわけです。あと舞台上で自分の身体も絵の具の一つだ、ステージもキャンパスだという感じの舞台表現もあります。それを見ていたとき、高校生でしたけれども、「具体っていいな」とそういうところで惹かれてました。縁あって、入ることになったんです。それまでの美術というのは、対象を見て写すだけという描写の作品が主流であったんですね。それに対して、心の中のものもやを具体的に示した、「具体」の初期の作品は表出という感じがします。

はた： まさに「表出」と思える具体美術の作品は初期の作品の方が、割と障害のある人の作品に一番も二番も通じるものがあると感じました。美術という一つの制度・システムからはみ出したところにスタートした具体美術が、だんだん美術の枠の中に収められていくというのは、どこかでシステムに入らないと作品として認知されない、意味を持たないという現実があるんだと思う。

今井： 「具体」は最初のころ、パフォーマンスみたいな作品が多かったが絵画に収められていったのですが、それは、今と違って、海外に気軽に行けなかった時代だったので、船便で絵画の作品を送る方が楽だった。メディアとしては扱いやすいという理由があった。美術という制度においては、表現者が自分の作品を「アートである」と言いきってしまうと、そういうふうに見られるし、見ざるを得ないかもしれないが、障害のある人たちはそんなことお構いなしでやっているわけなので、アート云々に対して取り扱いが慎重にやらないと難しいのかなと思います。無視するものでもないし、注目すべきものはスポットを当てる必要がある。私も、良いと思った作品は人に勧めたくりますし、それは自然な行為ですから。

山中： 僕のイメージで「表現」について考えることがあります。知的障害者と作家とどこが違うのかということ、意識して自分のイメージの源泉に接触する、僕の言葉では心の中の落差と言うんですが、一つの贅言で言えば、自分の意識の中でその深みにまで行って、自分の源泉の水を汲んできて、血を吐く努力をしてその落差をおりて、水を汲んできて表現する作品は、まさに芸術家の作品だと思う。ところが、いわゆる知的障害のある人たちは、心の中の落差を意識しなくても、そこの水辺に行かされてしまう。その水辺がすぐ近くにある。だからその水を汲んできて表現をすることが彼らには可能になっている。彼らは好むと好まざるに関わらず、僕の言葉で言う、イメージの泉に近いところに行かされていってしまっている存在なので、そこの「意」を持った人は表出が出てくるのです。

今井： 一番大切なのは、何にもとられないということだと思ってるんですね。そうなると思えばみださざるをえないという側面があるといえますね。「具体」の作家で、足で描く画家がいます。彼は、描く様子を見せたいからそうしたわけではなく、力を表現したかったわけなんです。最初、筆で荒っぽく描いてただけでは、自分の思っている力が表現できない。そのうち手で引っ掻いたりしても、まだ弱い。で、足で描いた。また絵には形があるとは限らない。どうして形がないといけないの？ということでは形がなくてもいい絵。平らであるとは限らない。それから、上下があるとは限らないとか、また絵の具でなくても構わない、異物を貼り付けてもいいんじゃないか。そういうふうにとらわれないところから始める、それが一番の表現のルールだと思ってるんですね。

はた： 知的障害者といわれている人、本人は誰に見せるためでも、どこに飾るためでもなく延々とつくっているだけなんです。私は、そういうものの中から心にピンピン来るものを見つけて、一人で喜んで愛でているんですけど、山中先生がおっしゃった「意」ということばが、私はとても、心に残ってしまっているんです。障害者が抱えている社会状況というもののなかに、「表現」とか「アート」を糸口にした意みたくないものがたくさんあれば潜在化している彼らの独創的で多くのインスピレーションを放つ表現が、広がっていくのではないかと考えているんですけどね。私にとって「意」の発見はとてもクリエイティブな楽しさです。

山中： 私がその人の「意」だと判断するのは、その人の目が光っているかどうかなんです。そのところを見逃さないことなんです。それが「意」なんです。だから、画用紙を与えたらうまくいくとか、ではなくて手をかえ品をかえやっていると見つかるといいたくいのものではない。彼らが延々として集めている、他の人から見たら、ゴミ集めみたいにしか見えないものが、一所懸命集めてやっているんだとしたらそのことが「意」なんです。そのことを大事にしてあげる、その人が例えば、虫を一所懸命集めて、虫と話をしている。そのことが、彼らにとってとても心安らくことであり、目が光ることだったら、それが私は「意」だと思うんです。いわゆる美術、いわゆるダンス、いわゆる音楽とかいうようにジャンル分けをして、「意」があるかないかじゃないんです。どの部分に心を砕いているか、目が輝いているかということを見落とさないことであって、そのことをどうやって大事にできるかということがおそらくその人たちの「心を大事にする」ことに繋がっているのだと私は思っていますよ。

はた： 今日はとても濃縮された体験の一日でした。多くの方々のご協力に本当に感謝いたします。皆さん、ありがとうございました。



「ボーダレス・アートギャラリーNO-MA」開館

# アウトサイダー・アートと インサイダー・アートの交差点

佐藤真文



かつて朝鮮通信使も通ったという近江八幡市に、時間が止まったような「伝統的建造物群保存地区」がある。この町並みの一角に、二年前から空家になっていた築七十年の町家を改装して、「ボーダレス・アートギャラリーNO-MA(ノーマ)」がオープンした。

このギャラリーは、「芸術と福祉の交差点」を目的に、滋賀県社会福祉事業団が企画・運営している。戦後間もない頃から、県が福祉事業として取り組んできた、障害者の造形支援活動のなかで制作された作品群を展示するほか、知的・精神・身体障害者や美術教育を受けていない人々の作品などの、いわゆるアウトサイダー・アートのみだけでなく、多様なアーティストたちの作品を同時に展示していくことを目指して開設された、全国でも珍しい「ボーダレス」なギャラリーである。その考え方をひと言でまとめると、障害者のアートに対する先入観や現代美術が陥りがちなコンセプト偏重主義を取り払って、モノ自体の力に真摯に向き合おうとすることと言えるかもしれない。

まず、近江商人の心意気が偲ばれる数奇屋造り旧野間邸の建物がいい。木塙をくぐって前庭を通り、広い土間で靴を脱いでギャラリーに上る。すると畳の大広間をつなぐ廊下や天井造りにせよ、手摺や欄間のさりげない装飾にせよ、この家に仮知を傾けた野間家の人々の人柄が、手にとるように肌に感じられる。ギャラリーに生まれ変わっても、ここに訪れるアーティストは、まずこの建物との対話からモノづくりを始めることができるだろう。

だからこそ、このギャラリーに展示されるモノたちには何か不思議な力が宿ってしまうのかもしれない。開催中の開設記念企画展「私あるいは私～静かなる燃焼系～」の会場に並べられたモノたちは決して派手ではないが、それぞれに禍々(まがまが)しいオーラを発していた。

まず初代宮川香山に度肝を抜かれた。技巧の粋を凝らした過剰なジャポニズムは目が眩むほどである。明治初期の殖産興業の時代に外貨獲得の主力商品であった陶磁器に込められた毒々しいほどのオリエンタリズムからは、常軌を逸した情念が今も迸ってやまない。一方に、県内の障害者施設に暮らし、六十九歳の今日まで、三十年もの間、作陶してきた伊藤喜彦の陶芸作品がある。香山と対比すると伊藤のいい意味での投げやりぶりが魅力的に映るのが不思議だ。高嶺格と森村泰昌の作品には、NO-MAの主(あるじ)であった野間家の人々との対話から生まれたような心地良さがあった。ギャラリー裏庭にある暗間の蔵におかれた巨大な水槽の中で、裸身の女性が人魚のように泳いでいる。高嶺によるこの映像インスタレーションには、私的で密やかなムードが漂う(水槽の中の女性は、つい最近、作家が近所の町家を舞台に挙式した妻だという)。まるでこの家に残る家族の記憶の気配と縁戚関係を結ぼうとするかのように、親密な作品だ。森村泰昌はフェルメールの《画家のアトリエ》に倣って、野間家の人々の驚きをよそに、純和室の中に十七世紀のオランダのアトリエを出現させた。このミスマッチが刺激的なのだ。

圧巻だったのは岩崎司である。精神を病んだ七十六歳の老人が日々病院で描き、祈りの言葉を書き込んでいる独自の「宗教画」。部屋いっぱいに張り巡らされたその物量は文字通り常軌を逸している。人間の生の営みの果てに生み落とされるモノたちの力に気圧(けお)されるのだ。ここには静かに禍々(まがまが)しいエネルギーを発散させているモノとの出会いがある。映画というイリュージョンだけを相手に日々悶々としている私にとって、モノの存在感の威力には嫉妬するばかりであった。

モノたちに真摯に向きあえば、自ずと「ボーダレス」になる。福祉現場を支配する教育主義的な芸術観もアートシーンの晦渋な理論も、モノに虚心に立ち向かう際のバリアーとしては同質のものである。「ボーダレス」とは障害の有無や職業や表現形式の相違についてばかりではなく、モノの力を目の当たりにした「理屈の武装解除」のことであるのだ。アウトサイダー・アートと現代美術のボーダーは、モノそのものにはなく、モノの見方のほうにあるのではないか。このボーダレスギャラリーは静かにそう挑発しているのではないかと思った。

◎ さとう・まこと [映画監督]

8月16日発行「美術手帖」より転載

## 開設記念展「私あるいは私～静かなる燃焼系～」

2004年7月3日(金)から9月20日(月・祝)開催



高嶺 格

伊藤 喜彦

森村 泰昌

岩崎 司

初代 宮川 香山



## レセプション風景

7月2日(金)午後3時より、レセプションがギャラリー向かいの野間清六邸で行われました。開設記念企画展出展作家である伊藤喜彦氏、森村泰昌氏をはじめ、美術関係者等約70名が集まるなか國松善次滋賀県知事、京都国立近代美術館館長内山武夫氏からお祝いの言葉がありました。



伊藤喜彦氏

國松善次氏

森村泰昌氏



## 開所式 2004.6.12(土)のもよう

6月12日(土)午後1時よりギャラリーNO-MAで開所式が行なわれました。

滋賀県知事(代理:出納長池口博信氏)をはじめ、地元近江八幡市川端五兵衛市長、日本財団森田文憲氏から心のもったご祝辞がありました。また、このギャラリーの開設に功績のあった石井和浩氏(石井建築設計事務所所長)、木村荘右衛門氏(木村工務店代表)、そして家屋の持ち主の野間令子氏へ感謝状が贈呈されました。

有地左右一氏(映像作家)によるNO-MA誕生までのロードムービー上映をはさみ、トークショーでは、井上正隆氏(もみじ寮寮長)、石井和浩氏、はたよしこ氏(当事業団アートディレクター)よりNO-MAへの期待やここで繰り上げられるアートシーンへの思い等がそれぞれの視点で語られました。



井上正隆氏 石井和浩氏 はたよしこ氏

## 10月 合同企画展 予告

### i n g展・・・障害のある人の進行形・・・ (新たに現る滋賀の造形と絵画)

毎日、滋賀のどこかで「ボン!と手のひらから生まれてくるように」造形作品や絵画作品が生まれています。そんな「現在進行形・・・i n g」の作品を一堂に集め、展覧会を開催します。

この秋、是非NO-MAに足をお運び頂き、今の時代に息づく作品たちと語りあって下さい。

2004年10月1日(金)～10月31日(日)  
開館時間：10時から17時  
休館日：月曜日(11日祝は開館。12日休館)



大井 康弘

## 友の会会員限定ツアー参加者募集!

信楽青年寮(滋賀県甲賀郡信楽町)の創作現場を訪ねるツアーです。

実施日：2004年10月8日(金)  
行程：A.M 10時 ボードレス・アートギャラリーNO-MA集合  
施設・作業所合同企画展見学  
A.M 11時～信楽へ専用車にて移動。昼食  
P.M 1時～創作現場見学他  
P.M 4時 現地(信楽高原鉄道・信楽駅)解散

募集定員：10名 参加費：無料(往復の交通費・昼食代は個人負担となります)  
申し込み期限：9月末日まで 申し込み先：友の会事務局(NO-MA内 TEL 0748-36-5018)

ボードレス・アートギャラリーNO-MA

〒523-0849 滋賀県近江八幡市永原町上16

お問い合わせ：TEL&FAX 0748-36-5018

発行者：社会福祉法人滋賀県社会福祉事業団企画事業部